

人と防災未来センター 平成 27 年度事業評価

* 評価基準 (4 段階評価)

S : 大変評価できる
 A : 評価できる
 B : あまり評価できない
 F : 評価できない

評価単位	評価	委員コメント
展示	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年間の来訪者 50 万人を維持しつつ、海外向けの広報活動を行っており、その結果として多くのベトナムからの来館者があつたり、他の機関とも連携するなど積極的に来訪者数の維持に努力している。 ・ 来訪者を待つだけでなく、センター外での巡回展も 20 余年前の震災の事実を風化させない意味でも意義深い。
資料収集・保存	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料の永年保存に各種の手法を駆使して意を尽くしている。 ・ 所在不明提供者の調査は意義深い活動である。 ・ また、長年の努力により、震災関連のクリアリングハウスになりつつある。図書や写真のみではなく、図録に所載の立体的な事物についてもアーカイブ化により後世に伝えることは意義あるのではないか。
実践的な防災研究と若手防災専門家の育成	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 災害資料の継承と災害対応実務研究を旨とするセンターでの研究者の養成の是非については長く議論が続けられてきたが、社会貢献活動にも関わった若手研究員の大学教員への道が拓けつつあり、論議の溝は狭まっている。
災害対策専門職員の育成	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ 首長を対象としたトップフォーラム、自治体職員に対するマネジメントコースでの研修は、兵庫県内の自治体職員の育成の枠を超えて全国の災害関係職員の育成にまで対象を拡げており、高く評価されるべきことについては論を俟たない。
災害対応の現地支援・現地調査	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネパールの地震災害、関東・東北の豪雨災害に関して要請を待つことなく被災地に赴き、調査を実施するのみならず、指導をも行っていることは評価できる。 ・ この事業評価項目については、大規模な災害の有無、災害時の現地での支援の有無により、事業評価の境界条件が変わることに一考を要する。
交流ネットワーク	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 震災後に民・産・官・学を結集して始まった「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」を受け継ぐ「災害メモリアルアクション KOBE」を、センターが主宰することは地域の交流ネットワークをさらに活性化する点においても有意義である。